黙想:聖木曜日・主 の晩餐

黙想のテーマ:「イエスは使徒たちの足を洗われた」「神はご聖体においてご自身を私たちに与えてくださる」「ご聖体と司祭職に感謝をささげる」

イエスは使徒たちの足を洗われた

神はご聖体においてご自身を私たち に与えてくださる

ご聖体と司祭職に感謝をささげる

「『さて、過越祭の前のことであ る。イエスは、この世から父のもと へ移る御自分の時が来たことを悟 り、この世にいる弟子たちを愛し て、この上なく愛し抜かれた』(ヨ ハネ13・1)。このような言葉で聖ヨ ハネは、福音書を読む人々に、その 日には何か偉大なことが起こるであ ろうことを告げています。前置きと してとしてのこの言葉は優しい愛情 に満ちています (…)。 イエスの一 言ひとこと、一つひとつの仕草を理 解することができるように、今から 聖霊のお助けをお願いすることにし ましょう | m と聖ホセマリアは私た ちに勧めています。今日、主のなさ ることすべてに注意を払いたいと願 う私たちは、使徒たちの足を洗うと いう、主の雄弁な所作に思いを巡ら せます。

ご受難直前の最後の晩餐は、愛と親密さと回想の雰囲気に包まれていました。「イエスは、御父がすべてを

ご自分の手にゆだねられたこと、ま た、ご自分が神のもとから来て、神 のもとに帰ろうとしていることを悟 り、食事の席から立ち上がって上着 を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまと われた。それから、たらいに水をく んで弟子たちの足を洗い、腰にま とった手ぬぐいでふき始められた| (ヨハネ13・3-5)。使徒たちは、普 通なら召使いしかしないことをイエ スがしておられるのを見て、衝撃を 受けたでしょう。しかし、時が経つ につれて、彼らはイエスが何を伝え たかったのかを理解しました。現代 に生きる私たちにとっても、神がそ のような立場に身を置かれ、ご自分 の手で友人の足のほこりや汚れを拭 われることを想像するのは容易では ありません。

キリストに洗っていただくことは、 私たちが自分で清めたり、清潔にし たり、聖別したりすることはできな いということを認める行為です。

「この真理を理解するのは容易では ありません。もし主が私に仕え、私 を洗い、私を強め、そして私を赦し てくださらないなら、私は天の国に 入ることはできないでしょう (…)。神は私たちに仕えることに よって、私たちを救ってくださいま した。私たちは、自分たちが神に仕 えるものと考えるでしょう。そうで はありません。神が私たちに惜しげ なく仕えてくださいました。神が最 初にわたしたちを愛してくださった のです。愛される経験なしに、愛す るのは難しいことです。神から仕え られる経験なしに、仕えるのはもっ と難しいことですした。これはキリ スト教におけるパラドックスです。 最初に行動されるのは神であり、主 **導的立場におられるのも神です。だ** からこそ、使徒としての務めに取り 組む前に、神が私たちに与えてくだ さるものを受け取ること、神が私た ちを何度も何度も清めてくださるこ

とを学ぶことがとても大切なので す。

イエスが使徒たちの足を洗う姿は、 私たちを驚かせてやみません。しか し、イエスの愛と謙虚さは、晩餐の 際に限りなく深まります。「主イエ スは、引き渡される夜、パンを取 り、感謝の祈りをささげてそれを裂 き、『これは、あなたがたのための わたしの体である。わたしの記念と してこのように行いなさい』と言わ れました。また、食事の後で、杯も 同じようにして、『この杯は、わた しの血によって立てられる新しい契 約である。飲む度に、わたしの記念 としてこのように行いなさい』と言 われました| (ーコリント11・23-25)

主は、「この秘跡を、ご受難の永遠の記念として、昔からの形象の成就

として、ご自分が行われた最大の奇 跡として、またご自身の不在によっ て悲しみに暮れる人々への最大の慰 めとして制定されましたしょ。イエ スはご自身を私たちに与えてくださ います。私たちのためにパンとぶど う酒になってくださいます。それ は、この上ない豊かな愛のしるしで あり、謙遜の最大の表現でもありま す。聖体の秘跡は、最愛の御方と自 分が同化され、その御方と一体とな り、できる限り神と親密に結ばれる ことを可能にします。聖ホセマリア はこう述べています。「主イエス・ キリストは、これ以外の沢山の慈愛 に満ちた行いもまだ不充分であるか のように、御聖体を制定され、私た ちが主のおそばにいることができる ようにしてくださったのです。なぜ それほどの愛をお示しになるのか、 その理由を知るのは難しいことです が、何も必要となさらぬ御方が愛に 動かされ、私たちを放置したくない とお考えになっていることだけはわ

かります。三位一体の神は人間を愛 してくださったのです」[4]。

私たちは驚嘆せずにはおられませ ん。父である神が私たちに与えてく ださったものすべてを、いくら考え ても決して理解することはできない でしょう。「それは不死の薬であ り、死に対する解毒剤であり、私た ちが永遠にキリストのうちに生きる ことを可能にする治療薬なのですし [5]。私たちは、こんなにも多くの配 慮、愛情、注目を受けるに値しませ ん。私たちはできる限りそれに応え たいと思いますが、そのためには神 の助けが必要です。「第一に重要な のは、私たちの努力や道徳的資質で はありません。ご聖体はキリスト信 者の生活の源泉であり頂点です。神 はご自身を私たちに与えてください ます。神は何かを与えるのではな く、ご自身を与えてくださいます。 だからこそ、キリスト信者の生活の 中心的な行為は聖体拝領なのです。

それは、神の賜物をいただいたことへの感謝と、神が私たちに与えてくださる新しい命への喜びです」
「『。

奉献文の司祭の言葉に、イエスの父 なる神への感謝が示されています。 「イエスはパンを取り、感謝して裂 き、弟子たちに与えて言われ た…」。受難の前夜である今日、私 たちも同じ態度でありたいと思いま す。寛大さは、私たちが受けた新し い命への感謝から自然に育まれるも のであり、私たちはそれを他の人々 と分かち合いたいのです。イエスが 愛するように、私たちも、イエスが 愛する人を愛するように心がけたい のです。「あなたがたに新しい掟を 与える。わたしがあなたがたを愛し たように、あなたがたも互いに愛し 合いなさい (ヨハネ13・34)。キ リストによって、キリストととも

に、キリストのうちに、私たちは最後まで愛することができます。イエスのように、私たちは人々の前にひざまずいて足を洗います。人々の悲惨さを理解し、肩に担います。

裁き、ねたみ、比較は消え去り、神 が他者のうちにお働きになる奇跡に 対する感嘆、喜び、神への感謝へと 変わります。「いとも聖なる感謝の 祭儀の中には、教会のすべての霊的 富が含まれている。すなわち、われ われの過ぎ越し、いのちのパンであ るキリストご自身が、聖霊によって 生かされ、また生かすご自分の肉を 通して人々に命を与え(る) | m。 そこから、私たちはキリストのいの ちを周囲の人々の心に、そして世界 の隅々にもたらすために必要な力を 引き出します。

聖木曜日は、神が教会に聖体の秘跡 をお与えになった日であり、すべて の司祭の聖性のために祈る日でもあ

この時期、他の多くの賜物の中でも、イエスは御母という賜物も与えてくださいます。私たちはキリストの犠牲の主な証人である聖母に頼り、謙遜に、受けたすべてに感謝して生きることができるよう、助けを求めます。

- [1] 聖ホセマリア『知識の香』83 番。
- [2] フランシスコ、説教、2020年4月5日。
- [3] 聖トマス・アクィナス、 Opusculum 57、聖体の祝日に、 lect. 1-4。
- [4] 聖ホセマリア『知識の香』84 番。
- [5] アンティオキアの聖イグナチオ、Epistle to the Ephesians、90。
- [6] ベネディクト十六世、説教、 2008年3月20日。
- [7] 第二バチカン公会議『司祭の役 務と生活に関する教令』5番。
- [8] ベネディクト十六世、Lectio divina、2011年3月10日。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/meditation/mokusou-sei-mokuyou/ (2025/12/16)